

Interview コリウスTIME

2P

「DPAT構築で大切にしたいこと～被災地支援における岡山県チームの心得～」  
来住 由樹 先生 (地方独立行政法人岡山県精神科医療センター副院長)

Interview Hand in Hand～身体疾患と精神疾患の関わり～No.10

5P

「自死予防のゲートキーパーに取り組む調剤薬局  
～薬剤師として「気づき」「つなぎ」「見守る」～」  
向井 勉 先生 (株式会社市民調剤薬局代表取締役)  
佐藤 真樹 先生 (株式会社市民調剤薬局マネージャー)

プライマリケアで用いるこころの薬③

8P

「ベンゾジアゼピン系抗不安薬・睡眠薬の単剤化について」  
桑原 秀徳 先生 (医療法人せのがわ瀬野川病院薬剤課)

フロントライン・こころのクリニック No.4

9P

医療法人社団秦和会 子どもメンタルクリニック 佐藤 喜一郎 先生 (院長)

世界の花言葉

11P

Volume  
10





## Hand in Hand

～身体疾患と精神疾患の関わり～ No.10

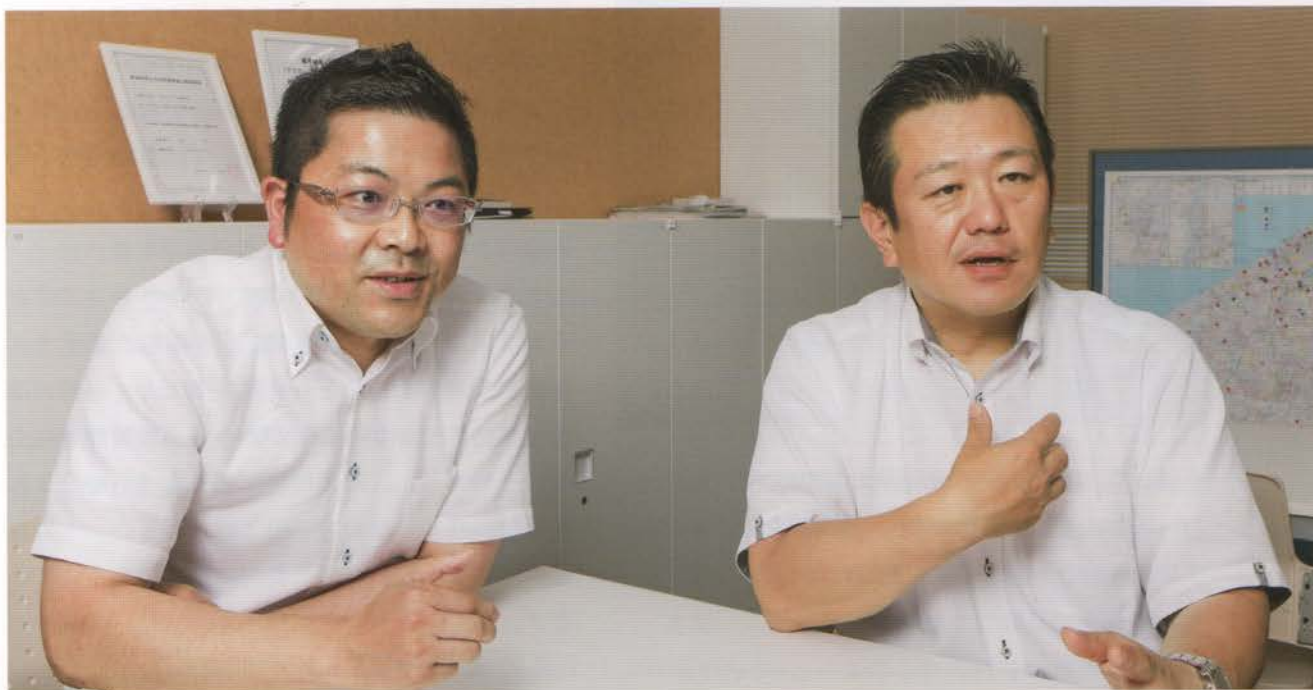
# 自死予防のゲートキーパーに 取り組む調剤薬局

～薬剤師として「気づき」「つなぎ」「見守る」～

株式会社市民調剤薬局

代表取締役 向井 勉 先生

マネージャー 佐藤 真樹 先生



(左) 佐藤 真樹 先生 (右) 向井 勉 先生

## 薬剤師が取り組む ゲートキーパー活動

向井 勉 先生

### ゲートキーパーに取り組んだきっかけ

株式会社市民調剤薬局（以下当薬局）では、平成23年から、薬局の新しい役割として、自死予防のゲートキーパー活動に取り組んでいます。現在、社員75名（うち薬剤師54名）のうち、70名（93.3%）が、「自殺予防の初期介入スキル研修」を受講し、日常業務のなかで、自死の可能性が高いと思われる方の早期発見と連携に取り組み、研修で得た内容をもとに、3年間で15人の自死リスクが高いと思われる患者さん

を、精神科医療や行政などの関係機関につなげる活動をしてきました。

新潟県の自死率は、28.1人／人口10万人（平成25年）と、全国平均の21.4人を上回ります。

私が、調剤薬局として、ゲートキーパー活動に取り組もうと決めたきっかけは、この状況を知り、少しでも自死者を救えないだろうかという思いと、過去に友人を自死でなくしたことでした。友人の自死に際し、医療スタッフとして働いていながら、友人に対して何もできなかったことを後悔し、「同じような後悔を、二度としたくないし、社員にもしてほしくない。そのためには、薬局として何かできることはないか」と模索するなか、ルーテル学院大学総合人間学部教授の福島喜代子先生がゲートキーパーの養成をされていることを知り、福島先生の主催する「自殺予防の初期介入スキル研修」を受講しました。研修



を通して、「調剤薬局の薬剤師は、地域のゲートキーパー活動に適した場所で働き、薬剤師ならではのアプローチができる」との思いを深めることができました。

### 初期介入のためのスキル研修

「自殺予防の初期介入スキル研修」は、自死の危機にある方と、直接、接する機会のある方々であれば、誰でもが受講でき、ゲートキーパーとしての役割を果たせるようになることを目的として行われています。研修では、少人数のロールプレイを中心に、実践的な「気づき」と「つなぎ」のスキルを身につけることができます。

昨年の夏には、当薬局の新人薬剤師が、社内でのこの研修を受講した10日後、調剤中の待ち時間に、一点を見つめていた患者さんがおり、その視線の先に自殺予防のパンフレットがあったことから、「あれ？ もしかしたら」と気づき、「よかったですら少し話をきかせてください」と声をかけると、「実は息子とうまくいかず、問題があって悩んでいる」と話してくれました。新人薬剤師が、

ロールプレイでの練習を参考に、「今自殺を考えていますか？」と問いかけると、その方から「考えたことがある」ということを引き出すことができました。

このことは、研修で「今自殺を考えていますか？」という一見タブーに思える言葉を発する理由を学び、ロールプレイで実際に発して、戸惑いを払拭したことが役立ったケースでした。

その後の会話から「でも息子が生きがいですから大丈夫です」という言葉をうかがい、息子さんを生きる理由としてとらえていること、自死の計画など具体性がないことがわかり、危険性は高くないと判断し、次回来局時に様子をうかがうことを薬歴に残し、薬局内で引き継ぎました。その方は、現在も、自死せず、薬局に来ていただいています。

### 調剤薬局が地域医療で果たす役割

調剤薬局は、全国に約5万5千ヵ所あり、扱う処方箋は年間約7億5千万枚です。薬剤師は、それだけ患者さんと話す機会に恵まれているにもかかわらず、薬剤ばかりに目が向きがちです。

患者さんの生活や全体像を知り、「個別の生活・暮らしのなかで、服薬している」という視点をもつことによって、ゲートキーパーとしての気づきのアンテナが高められるはずです。例えば、月に1度、2ヵ月に1度と定期的に来局する患者さんもいるので、保険証や服装など、病状以外の変化に気づくことができるのも薬局ならではの環境だと思えます。

また、自死予防とともに、アルコール依存などの問題に対しても、ゲートキーパーとして、薬剤師だからこそその力を発揮できると考えています。



# Hand in Hand

～身体疾患と精神疾患の関わり～ No.10

当薬局では、AUDIT（オーディット：WHOが作ったアルコール使用障害特定テスト）を活用し、アルコール依存におけるゲートキーパー活動も試み始めています。薬剤師は、相互作用の観点から、すでに「お酒はのみますか」程度の質問をしているので、AUDITで少し踏み込んで質問することは、それほど難しくはないと思います。

医療の軸足が病院から地域へと移るなか、健康や暮らしについての様々な相談に気軽に応じることができる調剤薬局が全国に広がり、ゲートキーパーとしての技術をもつことで、「調剤薬局は、地域医療に欠かせない」存在になるのではないのでしょうか。

## 「つなぎ」と「見守り」を大切に

佐藤 真樹 先生



### 多職種とつながるこころ強さ

ゲートキーパー活動においては、必要に応じ、患者さんを関係機関などに「つなぐ」ことも、役割として重要です。

当薬局では、地域のNPOが作成した自死予防パンフレットを活用し、精神科や心療内科などの専門医療機関や関係機関、自死予防に取り組む団体と連携しています。また、新潟市や近隣各市の弁護士会や行政、薬剤師会などが協力して、開催している「暮らしとこころの相談会」にも参加し、例えば、借金問題で弁護士のブースにこられた方に、服薬や健康問題を抱えていることがわかり、薬剤師につなげるなどの連携を深めています。

また、こうした連携を通じて顔見知りになったPSWの方から、「この心療内科では認知行動療法を提供している」「この精神科クリニックではカウンセリングを提供している」など、調剤薬局の薬剤師には縁遠いと思われていた精神科医療機関の情報などをうかがい、選択肢の1つとして、患者さんへ情報提供を行うなど、多職種とつながっている薬剤師だからこそのアプローチも増えてきました。さらに、PSWの方からは「患者さんから依存されすぎないように、距離をおいてください」といった対応時の注意点も指摘していただき、各専門家の方々と多職種連携の効果とこころ強さを感じています。

今後は、自死予防など地域の健康を支えていくために、「あれから、いかがですか」「お薬が減りましたね」「眠れていますか」など、患者さんを継続的に見守り、支援していくことも、かかりつけ調剤薬局の薬剤師ならではのゲートキーパーとしての役割ではないかと思っています。